

3 すべての人に健康と福祉を

12 つくも責任をつかさどる

15 国の豊かさも誇ろう

17 パートナリングで目標を達成しよう



遺伝子組み換え・ゲノム編集に反対して、私たちの食べものを守りつづけてみましょう!

～身近に広がる遺伝子組み換え汚染～



1996年に遺伝子組み換え(以下、GM)作物の輸入が始まって以来、日本は世界有数のGM輸入国になりました。グリーンコープは、安全性が確立されていないGM作物が広がっていくことに危機感を持ち、GM作物・食品に反対する運動を進めています。

その運動の一つとして、毎年各生協で自生GMナタネ汚染調査を行っています。2023年の調査には14生協が参加し、合わせて238カ所で行われました。6月26日に開催したグリーンコープの調査報告会では、6生協から報告があり、各地の自生GMナタネの状況を共有しました。

7月22日に開催された全国の仲間が集う調査報告会と2月25日に開催されたGMOフリーゾーン運動全国交流集会の様子も併せて報告します。

調査を行った各生協からの報告

ひょうご 子どもたちも一緒に調査しました。

神戸港は、日本最大のナタネの荷揚げ港です。2022年には2検体から陽性反応が出ましたが、今年はナタネが1本も見つからず、アブラナ科のカラシナを調査し、すべて陰性でした。4年連続で陽性反応が出た深江浜地区では、製油工場が除草しているのか、ナタネの自生が昨年より少ないことを確認しました。

今年は親子と一緒に調査したり、「子どもの居場所」を利用する小学生が参加して検査を行うなど、調査活動の裾野を広げることができました。



深江浜地区のカラシナを検査したときの様子。結果はすべて陰性。

やまぐち 初めて陽性反応を確認しました。

山口市では2カ所で行った調査活動を行いました。国道9号線沿い、奥戸付近で採取した自生ナタネはラウンドアップ耐性の疑陽性でした。現在、二次検査の結果待ちです。山口市内の国道2号線の中央分離帯で採取したナタネは、ラウンドアップ耐性が陽性でした。

山口市では、今まで陽性・疑陽性の反応が出たことがありませんでした。私たちの身近な地域でもGMナタネが自生していることを、やまぐちの組合員にしっかりと伝えていきたいと思ひます。今後は仲間を増やし、今年は実施できなかったナタネの抜き取りも調査活動と共に進めていきます。

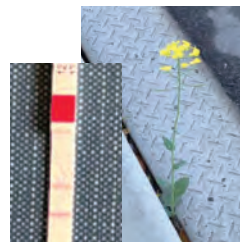


大型トラックが行き交う国道2号線沿いで採取したGMナタネ。

ふくおか 活動を継続することの大切さを実感しました。

ナタネの荷揚げ港である箱崎頭周辺では、季節にかかわらずこぼれ落ちたナタネが芽吹き、花を咲かせています。今回は5検体からラウンドアップ耐性の陽性、1検体から疑陽性の反応が出ました。箱崎頭近くの福岡市東区名島では、車道と歩道の間に咲いたナタネから、ラウンドアップ耐性の陽性反応が出ました。

これまで陽性反応のナタネが採取された地域では、清掃や抜き取りが継続して行われており、今回ナタネやカラシナは見つかりませんでした。抜き取り活動や調査を継続することの大切さを実感しています。



福岡市東区名島で採取したGMナタネ。検査で陽性を示す赤い線2本を確認。

2023年度 グリーンコープ自生GMナタネ汚染調査結果

調査した生協名	調査箇所数	1次検査で反応が出た検体		
		ラウンドアップ	バスタ	判断不可
おおさか	9	0	0	2
ひょうご	5	0	0	1
とっとり	5	0	0	0
(島根)	5	0	0	0
おみやま	7	0	0	1
ひろしま	10	0	0	3
やまぐち	15	1(陽性), 1(疑陽性)	0	2
ふくおか	55	7(陽性), 1(疑陽性)	0	1
さが	5	0	0	0
(長崎)	5	0	2(疑陽性)	0
くまもと	80	0	0	2
おおいた	18	0	0	0
かごしま	9	0	0	0
みやざき	10	0	0	0
合計	238	10	2	12

「ラウンドアップ」「バスタ」は共に除草剤。遺伝子組み換えにより、これらの除草剤に耐性を持つナタネはこの検査で陽性反応を示す。

2023年 全国遺伝子組み換えナタネ 自生調査報告会

7月22日 グリーンコープ参加者:56人
主催:遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン

2023年の調査では、7団体が38都道府県で検査しました。その結果、8道県で22件のGMナタネが発見されました。

グリーンコープの調査結果について、グリーンコープ生協ひょうごご理事長の田内理恵さんが報告し、「これからも全国のみなさんと共に運動を力強く進め、仲間を増やし、未来の子どもたちの食卓と環境を守っていきます」と述べました。

※「遺伝子組み換え食品を考える中部の会」の三重県の調査分を除く

2023年 GMナタネ 全国自生調査結果	検体総数	ラウンドアップ耐性 陽性	バスタ耐性 陽性	両耐性 陽性
	723	16	6	0

くまもと グリーンクラブや行政と協力して検査しました。

八代港で採取したナタネを持ち帰り、グリーンクラブの方も参加して検査を行いました。結果は陰性でしたが、グリーンコープの伴走者であるグリーンクラブと一緒に検査ができたことは大きな成果でした。東地域本部こうした地区の調査では、毎年市議会議員も参加して検査を行っています。また、東地域本部たつた地区の調査には、熊本市職員が参加し、東地域本部すぎなみ地区の調査には、町議会議員や熊本県の職員も参加しました。

今回調査したことを来年開催の「GMOフリーゾーン運動全国交流集会inくまもと」につなげていきたいと考えています。



合志市の市議会議員の方と一緒に検査の様子。

(長崎) 身近にGMナタネが自生していることを実感しました。

毎年各地域で1カ所、前年と異なる場所を調査しています。諫早市東部の採石場近くに、ナタネがまとまって咲いており、検査したところバスタ耐性が疑陽性となりました。長崎市女神大橋付近でも、カラシナからバスタ耐性の疑陽性の反応が出ました。

今回(長崎)の調査で、初めてGMの疑陽性が確認されました。今までその出来事だと思っていたGMナタネの自生が、身近に迫っていることを感じました。今後は他の方でも、継続して調査を行ってまいります。



諫早市で採取したナタネから、バスタ耐性の疑陽性の反応が出ました。

おみやま 除草が進み、自生ナタネが減っています。

水島港や宇野港周辺と、飼料工場へ向かう幹線道路沿いを中心に調査しました。飼料工場前の1検体は判断できず、現在二次検査を行っています。宇野港の以前ナタネを見つけた場所では、舗装や除草が進み、ナタネもカラシナも見つかりませんでした。製油会社でも直接船から荷揚げを行うなど、ナタネが落ちないよう取り扱いは配慮しているようです。

GMナタネは季節を問わずに開花する習性があるので、今後は他の季節にも調査したいと考えています。



飼料工場に向かう幹線道路沿いを調査しました。

第17回 2023年2月25日 グリーンコープ参加者:38人 GMOフリーゾーン運動全国交流集会in東京

主催:第17回GMOフリーゾーン運動全国交流集会in東京 実行委員会

GMOフリーゾーン運動は、日本の農業や生物多様性を守るため、GMO(遺伝子組み換え作物)を栽培しない地域を全国に広げる取り組みです。毎年取り組みの趣旨に賛同する団体が集会を行っています。

集会では、グリーンコープ生協おおいた理事長の薬師寺ひろみさんが各生協での取り組みについて報告し、「運動を継続し、GM食品やゲノム編集食品を食べたくない消費者が選択できるよう表示を求めています」と述べました。

来年の集会は、グリーンコープ生協くまもとが主催団体の一つとなり、熊本県で開催されます!

全国に広がるGMOフリーゾーン

2023年GMOフリーゾーン宣言農地 (2023年2月発表)

全国では、106,919 ha。この1年間で883 ha増えた。GMOフリーゾーンを宣言した農家を応援する個人サポーターは25,638人、事業者サポーターは172社となった。

グリーンコープ生協おおいた 理事長 篠原 佳奈子

長かったコロナ禍がついに終わりを迎える。コロナが終息したら趣味の一つである海外旅行を復活させたい。やっとその時がきた♡とワクワクしている。

ところで、私はなぜ旅行が好きなのか…。その土地、空気、人、食べ物、文化に触れることが楽しいのはもちろん、ストレス発散になること、新しい発見があること、非日常を体験できること。大体月並みな理由なのだが、最大の理由は「開放的になれること」だと思ふ。特に海外だと日本語以外の言語で身振り手振りも交えコミュニケーションをとったり、時には現地のタクシーのおっちゃんやと喧嘩したり!日本だと自己表現が苦手な自分もなぜか海外だと自己表現ができてしまう。不思議である。

大好きな海外旅行を復活させて、また日々の活動を頑張ろうと思ふ。

11月で20周年を記念して 産直びん牛乳

11月17日の投票結果発表します!

●200字以内 (写真・イラストも大歓迎)

●生協生協名、年齢、Eメール、所属生協名を明記し、郵送またはFAXにて提出してください。投票分にはクレジットカードの購入に利用できます。500円を上限とし、住所氏名などの組合員の個人情報(本紙に掲載の場合のみ)も使用します。

〒101-8506 福岡市博多区博多駅前1丁目1-1 博多区博多区民センター3F グリーンコープ福岡市博多区事務局 フォンカス へ

〒101-8506 東京都中央区新富1丁目1-101 株式会社グリーンコープ へ

FAX 03-6244-1811 7-67-6 株式会社グリーンコープ へ

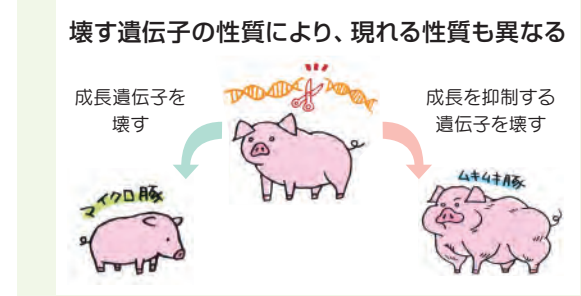
mailto:info@greencoop.or.jp

を米国の企業が開発。2023年3月20日に日本で4番目のゲノム編集食品として承認された。コーンスターチの原料や工業用糊、化粧品などに使われる可能性がある。

食用コオロギなど 昆虫食の開発も推進

政府は、代替肉や昆虫食などフードテックを産学官が連携して研究開発することを推進しており、中でもゲノム編集した食用コオロギの開発を積極的に進めている。成長が早いコオロギや低アレルギーなコオロギ、皮膚の色素がないコオロギなどの研究が、いくつかの大学や関連企業で進められている。

※2:食の最先端技術



ち、環境の中で生きていくためにバランスをとっている。ゲノム編集とは、目的とする遺伝子と類似した配列を関連して切断してしまうオフターゲットという現象が高い頻度で起きている。致命的なDNAを切断してしまったら大変なことになる。遺伝子にも表示がないため、農家にも選択権がない。有機認証制度では、ゲノム編集作物の認証を可能にしようとしている。

子どもたちの安全のためにも、学校給食にGM食品やゲノム編集食品を使わないよう求めていることが急がれる。政府に規制を求め、自治体が独自の条例をつくるよう、これからも消費者の声を届けていこう。

を米国の企業が開発。2023年3月20日に日本で4番目のゲノム編集食品として承認された。コーンスターチの原料や工業用糊、化粧品などに使われる可能性がある。

食用コオロギなど 昆虫食の開発も推進

政府は、代替肉や昆虫食などフードテックを産学官が連携して研究開発することを推進しており、中でもゲノム編集した食用コオロギの開発を積極的に進めている。成長が早いコオロギや低アレルギーなコオロギ、皮膚の色素がないコオロギなどの研究が、いくつかの大学や関連企業で進められている。

※2:食の最先端技術

現在流通しているGM作物の9割が、ラウンドアップやバスタなどの除草剤をかけても枯れない性質を持つ。多国籍企業が、自社の除草剤の利用を拡大することを目的にGM種子を開発した。除草剤とGM種子をセットで使えば雑草だけを簡単に枯らすことができるため、除草剤の大量使用につながっている。

発がん物質グリホサートが体内から検出

グリホサートは除草剤ラウンドアップの主成分であり、WHO(世界保健機関)の専門家機関IARC(国際がん研究機関)が発がん物質として認定している。

除草剤の使用増加に比例し、近年、グリホサートによる人体汚染が深刻化している。2015年に米国で行われた調査では、人の尿のサンプリングで93%からグリホサートが検出された。私たちはGM食品を摂取することに、知らない間に食品に残留したグリホサートを体内に取り込んでいます。

※1:将来にわたって食料の安定供給を図るために、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する戦略

また、RNA干渉法という遺伝子組み換えの手法を使って、害虫を駆除することで、害虫を突然死させる農薬(RNA農薬)の開発も進んでいる。農林水産省が推進する「みどりの食料システム戦略」では、化学合成農薬を減らす代わりにRNA農薬を使うことが考えられている。突然死を引き起こす遺伝子はすべての生物に共通するので、この農薬を浴びたり、作物を食べることで人間の影響が懸念される。

また、RNA干渉法という遺伝子組み換えの手法を使って、害虫を駆除することで、害虫を突然死させる農薬(RNA農薬)の開発も進んでいる。農林水産省が推進する「みどりの食料システム戦略」では、化学合成農薬を減らす代わりにRNA農薬を使うことが考えられている。突然死を引き起こす遺伝子はすべての生物に共通するので、この農薬を浴びたり、作物を食べることで人間の影響が懸念される。

GM技術を応用して、一定期間食べ続けられれば花粉症のアレルギー反応を抑えることができる米(スギ花粉米)が開発されようとしている。2000年度に開発が始まったが一時研究が中断していたものを、現政府が復活させた。

GM食品をめぐる新たな動き

2020年12月、日本で初めてのゲノム編集食品として高GABAトマトが承認され、トマトや苗、トマトビュレの販売が開始された。開発した日本のベンチャー企業が小学校や高齢者施設への苗の無償配布を打ち出したため、生協などの市民団体が中心となって自治体に「受け取らない」と要請を行っている。

2021年には京都大学と近畿大学が、ゲノム編集によって肉厚になるマダイと、成長が早まるトラフグを共同開発。京大内に企業を立ち上げてネット販売を開始した。

京都府官津市が、ゲノム編集のトラフグをふるさと納税の返礼品に採用したため、市民団体による反対運動が広がっている。

新たに日本で承認されたゲノム編集トウモロコシ

ゲノム編集によりデンプンを作る遺伝子を改変し、モチのような粘り気を出したトウモロコシ

GM技術を応用して、一定期間食べ続けられれば花粉症のアレルギー反応を抑えることができる米(スギ花粉米)が開発されようとしている。2000年度に開発が始まったが一時研究が中断していたものを、現政府が復活させた。

GM食品をめぐる新たな動き

2020年12月、日本で初めてのゲノム編集食品として高GABAトマトが承認され、トマトや苗、トマトビュレの販売が開始された。開発した日本のベンチャー企業が小学校や高齢者施設への苗の無償配布を打ち出したため、生協などの市民団体が中心となって自治体に「受け取らない」と要請を行っている。

2021年には京都大学と近畿大学が、ゲノム編集によって肉厚になるマダイと、成長が早まるトラフグを共同開発。京大内に企業を立ち上げてネット販売を開始した。

京都府官津市が、ゲノム編集のトラフグをふるさと納税の返礼品に採用したため、市民団体による反対運動が広がっている。

新たに日本で承認されたゲノム編集トウモロコシ

ゲノム編集によりデンプンを作る遺伝子を改変し、モチのような粘り気を出したトウモロコシ

人体への危険性が懸念される 遺伝子組み換え作物

特に子どもたちへの影響が心配されており、アレルギーなどの増加とも関係があるのではとも言われている。

遺伝子を壊して 生命のバランスを開す ゲノム編集技術

講師 天笠啓祐さん 遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン代表 市民バイオテクノロジー情報室代表

講演 遺伝子組み換え・ゲノム編集食品の最新情報

2023年6月26日 参加者:158人 主催:グリーンコープ共同会

2023年度自生GMナタネ汚染調査報告会